

昔、『狂った果実』というタイトルの映画があった。石原裕次郎を一躍スターにした映画で、湘南を舞台に、裕福な若者の無軌道な情熱を描いた物語だった。映画でも文学でも、タイトルに「果実」という言葉を使った作品はたくさんある。『不機嫌な果実』『熟れた果実』『禁断の果実』『青い果実』……。

梅の花は、春のさきがけだ。梅が終ると、桃、桜、藤……と、途切れることなく花のスターが咲き競って、季節は一気に初夏へと走り出す。そして、もうすぐ梅雨に入ろうという頃、うつそうと茂った梅の木の葉陰に、丸々とした青梅の実がチラチラのぞくぞくだ。

Taste  
of  
the Season vol.22

text by Noriko Morishita  
illustration by Mizue Hirano

## 甘美なる果実、 イチジク

エッセイスト 森下典子

はうっすらと産毛に覆われて、まるで霧に包まれているようだ。お尻みたいな割れ筋があり、なり口の窪みがおへソのように影を作っている。じっと見つめていると、まるで小動物がうずくまっているようで、いじらしく、なんだか指先がむずむずしてきて、ぎゅーっと握りしめたような衝動を覚える。

庭にもう一本、実のなる木がある。こちらはイチジクである。子どもの頃、葉っぱの付け根に、小さなスイカのような青い実がつくと、もいで遊んだが、軸からポンドみたいな白い汁が出て、青臭い嫌な匂いがした。

初めてイチジクの味の甘美を知ったのは、十代になってからだ。母が買ってきたイチジクが、ガラスの器に盛ってあった。

それは、まるでアラジンに出てくるラ

ンプの魔人の衣装のように、ぼつてりと膨らんだ袋状で、どこか妖しくエキゾチックだった。赤紫色に熟れきった実には、うっすらと黄緑色の縞模様があり、実の先端は割れて、その中に噴火口のような真紅が見える。

手に持つと、熟れた実は、ふくよかな胸のふくらみのように柔らかくしなだれ、ムツとするような甘い香りが漂った。軸を持って割くと、赤紫色の皮がつるりと剥け、皮の下から薄緑色の、茄子のような果肉が現れる。私は大きく口を開け、そのしなだれた実を頬張った。

(……ん)

まるで煮こんだような果肉の柔らかさ。その果肉の中に整列した小さなタネをプチプチと、歯のかすかな触感で味わう。やがて、味蕾に広がる重々しい甘みと、鼻腔に抜ける爽やかで甘美な風味……。

『熟れた果実』というエロチックな表現に出会う時、私はいつも、あのイチジクの味を思い出す。